

制作にご協力をいただく中で、技術について沢山の事を教えていただきました。ここでは動画ではお伝えしきれなかったお話の一部をご紹介します

金寄真一郎さん （株式会社ツキヨミデザイン 代表取締役）



以前はアパレルのデザイン事務所でグラフィックデザインを手掛けてこられた金寄さん。今回の企画のようなインクジェットプリントのデータ制作に携わるようになって20年だそうです。このお仕事の難しさをお尋ねしました。

「経験を積んで、感覚を掴むしかないですね」と金寄さん。

インクジェットプリントは、パソコンの画面上で数値から色のデータを作りあげます。画面上のカラーチャートの色と、生地に染色（プリント）されたカラーチャートの色は、当然異なります。お仕事で扱う生地の種類は、絹、綿、麻、ウール、レーヨン、ポリエステル、ナイロン、ストレッチ素材など様々です。さらに同じ素材でも織組織をはじめ産地や製作の季節が異なると発色も変わります。素材の特徴も熟知していなければなりません。

カラーチャートを制作する際、最初は色の数値の幅を大きめに取り、色のイメージを絞り込まないようにするそうです。1回目のカラーチャートのサンプルで生地の特性と発色を確認し、修正をした2回目のサンプルで色合いの細部を詰めていく、というのが金寄さんのセオリー。

「色は単独で見た場合と隣り合う色や全体と見た場合とでは印象が異なる。色の選択は、商品企画担当者の心象にも左右される。色の数値的な正解は、商品としての正解とは異なる場合もある」と金寄さん。

手描き友禅や手捺染に比べると人の手作業は少ない印象のインクジェットプリントですが、数値では計りきれない、人の感性が介在する技術と言えます。

日比野勝さん（株式会社日比勝染色 代表取締役）



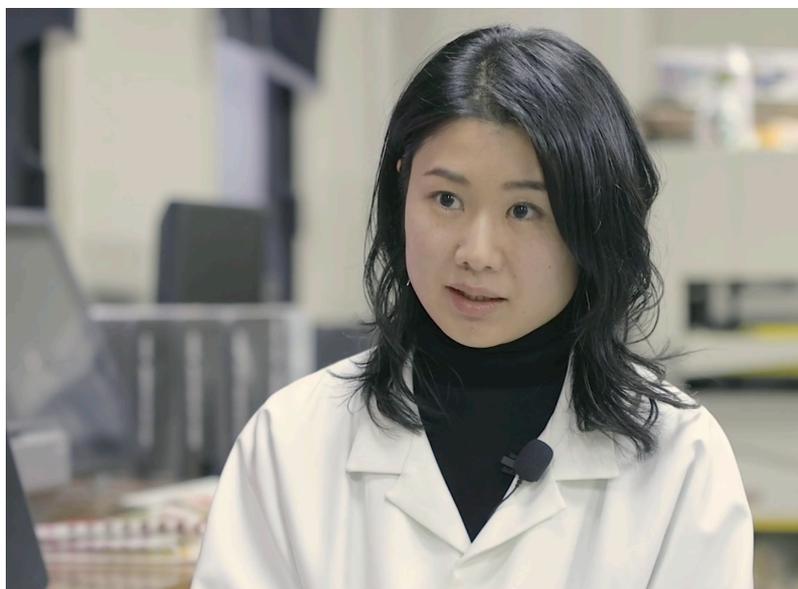
日比野さんは、20年ほど前からインクジェットプリントを手がけて来られました。先代の社長は手捺染の事業をされておられましたが、日比野さんの代で事業を転換されました。ご自身は型染の伝統工芸士のご経歴がありながら、パーソナルコンピューターに画像処理ソフトが登場した頃から、いつか機械で染色ができる時代がくるのではないかと夢を抱いておられたそうです。

動画では生地を機械にセットするシーンのみですが、機械を操るためには生地や染料など素材の性質を熟知していなければなりません。生地目を整えなければデザインが生地にまっすぐに染色されませんし、シルク、レーヨン、ウールなど生地が変われば発色も異なり、それぞれに適した前処理が欠かせません。

手捺染と比較すると、インクジェットプリントは型代がかからない分、消耗品であるインクが高価であるため、染め代が高くなることなど、インクジェットプリントならではの苦勞もざっくばらんに教えてくださいました。

「インクジェットプリントは、使い方次第で色々な可能性があると思います」と日比野さん。人の手しごとも、機械によるものも、技術は人の創造力次第かもしれません。

門田佳奈さん（株式会社千總 製作2部 課長）



今回製作した染織品の元になった〈束ね熨斗模様小袷紗〉をはじめ、スカーフなどのアクセサリー類の商品企画を担当されています。それぞれの技術の違い、表現の特色を熟知した上で、思い描く商品をどのように形にしていくのか、企画担当者の視点から解説いただきました。